著者・著作　紹　介

平成３１年３月

１．略歴

筆名：矢的　竜（やまと　りゅう）
本名：山本利雄　　昭和２３年（１９４８）生まれ　７１歳　京都府船井郡京丹波町出身
学歴：昭和４５年（１９７０）滋賀大学経済学部経営学科卒業
職歴：民間会社５社と江戸川区役所嘱託で３１年勤務

平成１３年（２００１）リストラで早期退職、投稿を開始
平成１５年（２００３）　第十回松本清張賞最終候補
平成２１年（２００９）　九州さが大衆文学賞佳作
平成２３年（２０１１）　デビュー作発表
平成２４年（２０１２）　彦根市に転居
他に歴史群像大賞優秀賞、中・近世文学大賞優秀賞、歴史浪漫大賞特別賞、歴史文学賞最終候補３回など

２．出版歴

平成２３年（２０１１）「折り紙大名」「大江戸女花火師伝」中央公論新社
平成２５年（２０１３）「あっぱれ町奉行　江戸を駆ける」　角川春樹事務所
平成２６年（２０１４）「光秀の影武者」　祥伝社
平成２７年（２０１５）「シーボルトの駱駝」　双葉社
平成２８年（２０１６）「椿の海」　　双葉社
平成３０年（２０１８）「三成最後の賭け」　新潮社

３．著書の概要

（１）「折り紙大名」　中公文庫　定価６６７円＋税

上総佐貫藩一万五千石の藩主・松平重治が「卑賤の者に筋なき書を送り付けたること」により領地を没収されたという史実をもとにした時代小説。

四代将軍・家綱に折り紙を献上し心を通じていた重治は、不治の病で家綱の余命が三か月と知る。矢も楯もたまらなくなった重治は竜神を折ることを期するが、独力では無理と知り、町娘のきぬに依頼の書状を発する。創作折り紙の天才・きぬは四苦八苦の後に竜神を折りあげる。

家綱の死後、改易となった重治はきぬや家臣を護るため、また倅の再興を期して命を賭ける。重治が自らに課したのは餓死という悲惨な戦いだった。

（２）「大江戸女花火師伝」　中公文庫　定価６７７円＋税

創業百三十年の老舗・鍵屋を継いだのは四女の佐絵。名目上の棟梁である婿の修造は戯作者を目指していた。だが質素倹約を軸とする「寛政の改革」の下では花火は贅沢の象徴であり、御政道を揶揄する戯作は発禁の対象だった。

お上の息を窺がいながら鍵屋は玉屋を育て、修造は十返舎一九や滝沢馬琴を支えていく。そして６７年ぶりという将軍の日光社参の前夜に玉屋が失火という不祥事を起こすが、それは意図されたものだった……。

（３）「あっぱれ町奉行江戸を駆ける」角川春樹事務所　定価１，６８０円＋税　四六判並製

第六代北町奉行（在位９年）・石谷貞清は就任直後に由比正雪の「慶安事件」に遭遇。副将格の丸橋忠弥らを捕縛し、内縁の妻や幼子を処刑。さらに翌年は「承応事件」で別木庄左衛門らを処刑し、牢人（失業者)問題の深刻さを痛感する。

６年目に江戸の八割を焼く「明暦の大火」に見舞われると、率先して復興に立ち向かう。その心底には延焼を防ぐための町並み再編という強固な決意を秘めていた。

吉原の移転、大名屋敷や寺社の移転、道路拡幅、火除け地の確保を進める一方、江戸城天守の再建は凍結、両国橋の架橋を目玉にするなどの大胆な策を強行する。

町奉行を返上した石谷は、私財を投じて牢人の再仕官斡旋に乗り出す。失業者に職を与えることが経済発展をもたらすという政策的理由もさることながら、孤立しがちな失業者の心身救済が不可欠とみていたからである。石谷が再仕官させた牢人は千人とも謂われている。

（４）「光秀の影武者」　祥伝社　定価１，４８０円＋税　四六判上製

姉川の合戦で浅井家の先鋒を務めた磯野員昌は佐和山籠城後に信長に仕えるが、安土喚問に応じず逐電し歴史から姿を消している。

厳しい信長の眼を逃れて磯野はどこに逃げ込み、どういう人生を送ったか。本著は磯野が明智光秀の坂本城に身を隠したと想定し、本能寺の変の謎に挑んでいる。

（５）「シーボルトの駱駝」　双葉文庫　定価６７５円＋税

オランダが将軍に献上しようとした二頭のヒトコブラクダは幕府の拒否にあい、興行師の手に渡る。楽太郎一座のさわと留吉夫婦が背中に乗る駱駝興行は江戸で大人気を博し、各地を巡回する。だが駱駝はシーボルトが日本の地理情報を入手するための手先だと疑われることになる。その嫌疑は果たしていかに……。

（６）「椿の海」　双葉文庫　定価６３０円＋税

かつて下総国にあった「椿の海」と呼ばれる巨大な湖は、寛文１０年（１６７０）に排水路の水門が開かれ、椿新田に生まれ変わったが、そこに至るまでには幾多の変遷があった。出資者の破産、地元百姓の反対、度重なる資金難などの障害を切り抜け、ようやく湖水を干し上げてみると、荒涼たる泥地と灌漑用水不足による飢饉が待ち受けていた。

孤独と絶望に打ちひしがれる主人公は、何に生き甲斐を見出すのか……。

（７）「三成最後の賭け」　新潮社　定価１，７００円＋税

太閤の唐入り（朝鮮侵攻）は「家康が豊臣政権の基盤を揺るがすために仕組んだ陰謀」だと看破した三成は、小西行長と結託して家康の排除に乗り出す。併せて朝鮮侵攻の早期中止をめざして苦闘する。太閤に面従腹背しながらの努力も実らず、太閤の死によって渡海軍は撤収する。二年後、三成と家康は関ケ原で対決するが、敗れた三成は自決することなく戦場を離脱する。三成は家康を追い詰める最後の賭けに出たのだった。

４．その他、すでに書き上がっている原稿の主題

吉宗の朝鮮人参国産化（阿部将翁）
大仏再建と大野寺の磨崖仏（陳和卿と伊行末）
江戸期最後の殉死（佐倉藩主・堀田正信）
アホウドリ（玉置半右衛門）
鎌倉大仏と建長寺の梵鐘（物部重光）
投入堂（代表的な懸け造りの社殿が築かれた経緯）
火縄銃の量産化（信長の戦略）
六文銭（真田幸村）　　ほか多数

矢的竜（本名：山本利雄）　住所　彦根市古沢町
eメール： ryu27828@zeus. eonet. ne. jp